

■教皇就任後のおもな活動

2013年3月の就任以来、教皇フランシスコは、祭儀や行事での説教や講話、教書、多くの海外訪問、あるいはビデオメッセージやソーシャルメディアの使用などによって、世界に向けた訴えかけを続けています。就任後のおもな活動は以下のとおりです。

主な行事

2013年

3.28 聖木曜日主の晩餐のミサ

カサル・デル・マルモ少年院（ローマ）にて。洗足式では、少女2人を含むさまざまな国籍と宗教の12名の受刑者の足を洗う。歴代教皇は、ローマ市内の大聖堂で住人である司祭の足を洗っていた。対象に女性が含まれるのは史上初。典礼規定が変更され、男性に限定する規則は撤廃された。（以降2014年ドン・カルロ・ノッチ高齢者・障害者施設／2015年レbbieビア刑務所／2016年カステルヌオーボ・デイ・ポルトの難民申請者施設／2017年パリアーノ刑務所／2018年レジナ・チェリ刑務所／2019年ベレットリの刑務所で行う。対象者はカトリック信者だけでなく、ムスリム、ヒンズー教徒、正教徒、仏教徒なども含まれている）

4.13 教皇庁改革のための枢機卿顧問会設置

枢機卿8名で成る教皇直轄組織（略称C8。公式設置は9.28）。背景にはバチカン銀行によるマネーロンダリング疑惑がある。教皇庁のベテラン官僚は採用しなかった。（2014年4月に1名追加、2018年ペル枢機卿辞職…未成年者虐待の市民法判決）

7.8 ランペドゥーサ島（イタリア）訪問

ローマ市外の初の訪問。イタリア最南端に位置し、アフリカから欧州へと向かう数十万の移民が漂着し続ける島。海辺でのミサ説教では、海上で命を落とす年間数百人に哀悼の意を表し、移民・難民への反感や無関心から目覚めるよう訴えた。

7.22-29 ブラジル司牧訪問

初の海外司牧訪問。350万人の若者が集まるワールドユースデー（WYD）リオ大会に参加。／病院や刑務所訪問

8.19 就任後初インタビュー

「そばに寄り添い傷をいやす野戦病院としての教会」、「教会は自分から外へ出て……人々のもとに出向く」「つねに人格を大切にしなければならない。……それぞれの事情から出発して、寄り添い歩んでいかなければならない」など、教皇の基本姿勢が見える。（参考邦訳『中央公論』2014年1月号）

9.1 「シリアの平和のための断食と祈りの日」開催の呼びかけ

カトリック信者のみならず、キリスト教諸教派、他宗教信者、すべての善意の人に参加を呼びかける（実施日9月7日）

2014年

2.24 教皇庁財務事務局新設

バチカン銀行による不正送金防止のため、監督と透明性を強化。

（1年かけたバチカン銀行内の内部調査後7.9にはバチカン銀行新総裁にフランス人実業家を任命）

4.27 列聖式

ヨハネ 23 世教皇、ヨハネ・パウロ二世教皇を列聖。

5.24-26 聖地巡礼（モットー「キリスト者の一致」）

イスラエル、パレスチナ訪問。ローマ教皇とコンスタンチノーブル総主教との歴史的初会談（カトリックと東方正教会の和解）から 50 年を記念。ヴァルソロメオス一世、ギリシャ正教会、アルメニア使徒教会、ほか諸教会とともにイエスの墓で祈る。教皇の聖地訪問はパウロ六世（64 年）、ヨハネ・パウロ二世（00 年）、ベネディクト十六世（09 年）に次いで 4 回目。パレスチナのアップバス議長、イスラエルのペレス大統領を、バチカンに招待。（6.8 に実現）

6.8 イスラエルとパレスチナ的首脳招待

アップバス議長、ペレス大統領、ヴァルソロメオス一世とバチカン庭園でキリスト教、ユダヤ教、イスラームの祈りによる「祈りの集い」、オリーブ植樹。非公式会談。

8.13-18 韓国訪問（モットー「起きよ、光を放て」）

第 6 回 AYD 関連行事、韓国 124 殉教者の列福式、朝鮮半島の和解を祈るミサ。

9.21 アルバニア訪問（モットー「神とともに——挫かれない希望に向けて」）

就任後初の欧州司牧訪問先として、諸宗教の共存する貧しいイスラームの国を選ぶ。信教の自由が許されない共産政権時代、28 年拘留され拷問と強制労働に苦しんだ 84 歳の司祭らの話に涙を流し、用意した原稿とは別に、迫害の続いたこの国への思いを率直に語る。

10.5-19 シノドス

第 3 回臨時総会「福音宣教との関連から見た家庭の司牧的問題」

10.19 列福式

パウロ六世教皇を列福。

11.25 欧州議会、欧州評議会訪問（ストラスブール・フランス）

両議会でのスピーチで、「経済よりも、人間の尊厳に軸を置く欧州の構築」を呼びかける

11.28-30 トルコ訪問

ムスリムとの集い、カトリック諸典礼教会、東方正教会総主教ヴァルソロメオス一世ほか、アルメニア使徒教会公主教、シリア正教会府主教、新教の牧師らとのミサ／バヴァルソロメオス一世との共同文書に署名／中東からの避難民との集い。

11.30 “奉獻生活の年”開幕（～2016 年 2 月 2 日）

2015 年

1.12-19 スリランカ、フィリピン訪問

スリランカ：宣教者ジョセフ・バス列聖式。長く激しい内戦後にある同国で、対話の重要性、人間の尊厳の尊重、和解と共通善のためにすべての人がかかわる必要と宗教者による祈りを説く。キリスト教以外の多民族、他宗教からの信者にも巡礼地となるマドゥー聖母大聖堂で和解と一致と平和のために祈る。

フィリピン（モットー「あわれむ心と思いやり」）：台風ヨランダ（2013 年台風 30 号）の被災者慰問が主目的。マニラでの家庭の集いでは、貧困は子だくさんに原因があるのではなく、「人間ではなく金銭を中心とする経済システム、子どもや高齢者、若者、失業者を除け者にする経済システム、使い捨て文化をもたらす経済システム」にあると訴える。ミサには、教皇行事として過去最大規模（6～7 百万の信者が集まった）。

バチカンへの帰路、中国上空での機内記者会見で受けた「明日にでも中国訪問を希望しているのだから、先日ダライ・ラマがローマにいた際に会わなかった理由は中国か」との質問は否定。

6.6 サラエボ（ボスニア＝ヘルツェゴビナ）訪問（モットー「あなたに平和を」）

内戦と民族浄化で諸民族が分断されたバルカン半島へ一日訪問。「蛮行に立ち向かうには、人間共同体の根本的価値を認識する必要がある」と語る。

7.5-13 エクアドル、ボリビア、パラグアイ訪問

エクアドル（モットー「喜びをもって福音宣教すること！」）：公園でのミサには約 100 万人が参加。ほか貧困層高齢者施設訪問など。

ボリビア（モットー「フランシスコとともに、わたしたちは福音の喜びを告げます」）：草の根運動諸団体の集会で「個々さまざまな排除と不正義は、排除と無関心のグローバリゼーションが生み出すもの」だと、利益のみに振り回されるグローバル経済のあり方を痛烈に批判。聖体大会開幕ミサの広場には 200 万人が集った。ほか刑務所訪問など。

パラグアイ（モットー「喜びと平和のメッセンジャー」）：「多様性はよいだけでなく必要なもの」（7.11 住民との集会スピーチ）。教会と行政による支援プロジェクトの対象である貧困地区を訪問。

8.6 被造物のための世界祈願日の新設を発表

教皇庁正義と平和評議会議長、同キリスト教一致評議会議長あて書簡にて、2016 年より毎年 9 月 1 日を「被造物を大切にす世界祈願日」とすることを宣言。

この祈願日は、過去数十年にわたり多くの宗教団体と指導者が協力してきた取り組みの一貫ともいえる。とくに東方正教会コンスタンチノーブル総主教との共鳴（『ラウダート・シ』7-9 参照）に支えられた、わたしたちの共通の家（地球）を守るための祈りと啓発活動促進の記念日。正教会における、神の創造を記念する日（9 月 1 日）から、カトリック教会と西方他教会におけるアッシジの聖フランシスコの記念日（10 月 4 日）までの五週間は、「被造物保護週間」とされている（欧州エキュメニカル会議）ように、この取り組みは世界各地で教会教派を越えた取り組みとなっている。

9.6 難民の受け入れを訴える

お告げの祈り後、欧州全土の教会、修道院、巡礼地に対し、それぞれ難民一世帯を受け入れるよう呼びかける。この数日後、バチカンのサンピエトロ大聖堂と聖アンナ教会で、難民 2 世帯を受け入れた。

9.19-28 キューバ、米国訪問

ももとはフィラデルフィアでの家庭大会参加が主目的であったが、20 年ぶりに米国と国交を回復した（教皇が仲介したといわれている）キューバまで足を延ばすことになった。

キューバ（モットー「いつくしみの宣教者」）：カストロ議長と面会。教皇のキューバ訪問は、ヨハネ・パウロ二世（98 年）、ベネディクト十六世（12 年）に次いで 3 回目。

米国（モットー「愛こそがわたしたちの使命」）：ワシントン DC、NY、フィラデルフィア訪問。史上初の米議会での教皇演説では、「米国民の財産である、神のもとでの平等、生命と自由と幸福を求める不可侵の権利」に忠実な社会を築くよう訴えた。国連本部での演説では「環境権」について説き、環境の濫用や破壊と弱者排除とのつながりを訴える。核兵器の完全撤廃を目指すべきとも述べる。グラウンドゼロでは諸宗教代表者や遺族との追悼式。

10.4-25 シノドス

第 14 回通常総会「教会と現代世界における家庭の召命と使命」

11.25-30 ケニア、ウガンダ、中央アフリカ共和国訪問

ケニア（モットー「恐れずに信仰に根ざして力強く立て」）：国連環境計画本部訪問。公平で包括的かつ持続可能な開発モデルによる被造物の保護を訴える。

ウガンダ（モットー「あなたがたは、わたしの証人となる」）：殉教者列聖 25 周年記念ミサなど。多くの移民を受け入れる同国に、この移民問題にいかに対応するかが、人間の尊厳と連帯への挑戦として問われていると語る。

中央アフリカ共和国（モットー「向こう岸に渡ろう」）：多数派のキリスト教徒と少数派のムスリムの対立で長期の紛争にある国民への慰めとして、開幕一週前に首都バンギで「いつくしみの特別聖年」開幕セレモニー（「聖なる扉」の開扉式）を行う。

12・8 いつくしみの特別聖年開幕（～2016.11.20）

裁くことよりいつくしみ（あわれみ）を第一とする神にならい、あわれみとゆるしを生きる一年間の特別期間。「自分とまったく異なる周縁生活者すべてに心を開き、彼らのもとへ行き、彼らの手を握り、彼らを引き寄せ、……彼らの叫びを自身の叫びとして、……偽善と利己心を隠すためにはびこることの多い無関心という壁を取り壊す」（いつくしみの特別聖年公布の大勅書 15 参照）ことを主眼にする。

聖年期間中、月一度の金曜日を「いつくしみの金曜日」とし、性産業から救出された女性の施設や、児童福祉施設、難民施設、病院など、特別な困難に置かれた弱者となりがちな人への寄り添いを示した。

期間中の一般謁見講話も「いつくしみ」がテーマとされ、「ゆるすこと」と「与えること」を二本柱にした慈善行為の実践を促した。

2016 年

1.12 インタビュー本『神の名はあわれみ』発刊

40 の質問に平易なことばで回答。インタビュアーは教皇と個人的に親しいイタリア人ジャーナリスト、アンドレア・トルニエッリ氏。数か国語で 86 か国で同時刊行。

2.12-18 メキシコ訪問（モットー「あわれみと平和の宣教者」）

メキシコ訪問前にハバナ（キューバ）に立ち寄り、空港内でローマ教皇とモスクワおよび全ロシア総主教との歴史的初会談を約 2 時間行う（2.12）。1054 年の東方正教会と分裂後、ここ数年は関係修復が図られるものの、ロシア正教会はソ連崩壊後の旧ソ連圏でのカトリック勢力拡大で緊張状態にあった。フランシスコ教皇は 2014 年 11 月、キリル一世総主教に、「あなたの望む場にはどこへでも行きま。お呼びいただけたら伺います」と対話を呼びかけていた。会談後、中東などで続く過激派によるキリスト教徒迫害やテロに対し、国際社会の緊急の対応を呼びかける共同宣言を発表。

メキシコでは、国内に蔓延する貧困、汚職、犯罪組織、麻薬、移民、先住民などの社会問題を取り上げながら、多様性の豊かさを訴えた。

4.16 ギリシャのレスボス島訪問

「EU-トルコ間難民送還の合意」が 3 月 20 日に発効した直後のこと。

対岸のトルコから海を渡ってくるレスボス島にある、約 4 千人の難民が滞在する収容施設モリア難民登録センターを訪問。大半はムスリムの難民に、「あなたがたは孤独ではない。希望を失ってはならない」と励まし、同時に人道危機であることを国際社会に訴え、紛争を駆り立てる武器の闇取引や悪質な移住ブローカーを非難。

港では、ヴァルソロメオス一世総主教とイエロニモス大主教とともに、海でなくなった難民の犠牲者への追悼を行い、難民問題への共同声明を発表。5時間滞在の後、帰路の教皇専用機には、2歳から7歳の未成年6名を含む、シリア難民の3家族12名を同乗させてローマに連れ帰った。彼らは聖エディジオ共同体の世話のもと、バチカン市内に滞在した。

6.24-26 アルメニア訪問（モットー「最初のキリスト教国への来訪」）

9月に完結するコーカサス3国訪問の第1弾。政治的な配慮で2回に分けられた。アルメニア正教会とのエキュメニカルな交流。帰路の機内記者会見にて、ラインハルト・マルクス枢機卿が、カトリック教会が同性愛者への対応を謝罪する必要があると述べたことについて問われ、「差別される人に敬意を払わず手を差し伸べなかったことを、教会は謝罪するだけでなく、ゆるしを乞わなければならない」と答える。

7.27-31 ポーランド訪問

WYD クラコフ大会（250万人参加）、聖母巡礼地チェンストホヴァ（25年前のWYD開催地）訪問／アウシュヴィッツ強制収容所で沈黙の祈り（スピーチ、講話は一切なし）／ポーランド王の洗礼1050周年記念行事

9.4 列聖式

マザーテレサを列聖。

9.20 世界宗教者平和の祈りの集い30周年（アッシジ）

毎年欧州各地で行われている諸宗教平和祈禱集会は、ヨハネ・パウロ二世の呼びかけで始まったもの。世界60か国から宗教指導者ほか政治、社会運動関係者500人以上が参加。

9.30-10.2 ジョージア、アゼルバイジャン訪問

ジョージア（モットー「あなたがたに平和を」）：信者が人口の大半を占める正教会の教会を訪問。正教会会員らとシリア、イラク、中東のための祈り。

アゼルバイジャン（モットー「わたしたちは皆、兄弟姉妹」）：カトリック少数派の同国（大半はムスリム）で、宗教を越えた兄弟愛を訴える。

10.5 エキュメニズム

英国国教会カンタベリー大主教との祈りの集い（教皇パウロ六世と英国国教会大主教との会談50周年記念）

10.31-11.1 スウェーデン訪問

宗教改革500周年記念合同祈禱会。相互聖餐についての見解は示さず。神における一致と協力について、ルーテル教会との共同声明発表。

2017年

4.28-29 エジプト訪問（モットー「平和の教皇が平和のエジプトへ」）

ムスリムの大イマームとの会談／キリスト者とムスリムの国際平和会議。コプト正教会と、洗礼の相互承認を確認する共同声明を発表。

5.12-13 ファティマ（ポルトガル）巡礼（モットー「マリアとともに、希望と平和の巡礼」）

聖母出現100周年記念と、出現を受けた2人の牧童の列聖式。

9.6-11 コロンビア訪問（モットー「初めの一步を踏み出す」）

世界第2位の生物多様性をたたえ、半世紀もの内戦で傷つき、麻薬戦争に怯える国民を励ます。帰路の機内記者会見では、米国の「若年層向け強制送還延期プログラム（DACA）」廃止決定を非難。

10.11 死刑制度反対表明

『カトリック教会のカテキズム』発布 25 周年記念講話にて（同文書 2267 の文言変更は、2018 年）

11.10 核保有反対表明

核兵器廃絶と包括的軍縮のための教皇庁国際シンポジウム参加者向けスピーチにて、広島・長崎に言及し、抑止としても核保有に反対。

11.19 貧しい人のための世界祈願日

新設後第 1 回目。この日のバチカンのミサには、ホームレスや難民などが 7 千人参列。ミサ後の教皇同席の昼食会には、生活困窮者 1500 人が招待され、さらに別会場でも 2500 人が招かれた。料理はバチカン調理室が用意し、ニョッキ、子牛の肉と野菜の付け合わせ、ティラミスを楽しんだ。以降、毎年イタリア各地で同様の昼食会が催されている。

11.26-12.2 ミャンマー、バングラディッシュ訪問

ミャンマー（モットー「愛と平和」）：9 割が仏教徒の同国とは、同年 5.4 にスーチー氏とバチカンで面会して国交を樹立。仏教指導者ほか、政治指導者との会合。

バングラディッシュ（モットー「調和と平和」）：9 割がムスリムの国で、ロヒンギャ難民の受け入れと救済に謝辞／司祭叙階式／平和のための諸宗教の祈り、キリスト教超教派の集いなど。

2018 年

1.15-22 チリ、ペルー訪問

チリ（モットー「わたしの平和をあなたがたに与える」）：軍事独裁政権による弾圧被害者と面会。先住民との対話も。弱者と地球の声に耳を傾け、「蓋をするのではなく向き合い、時間を取って話し合うことで対立を解決」することを訴える。複数の聖職者による未成年者への性虐待が公表されたことで、教会 9 か所が放火されるなど大スキャンダルの最中の訪問となり、政府、外交関係者らを前に公に謝罪、また犠牲者との面会も非公式に行われた。

ペルー（モットー「希望によって結ばれて」）：翌年のアマゾン・シノドスの前段階としてアマゾン流域の先住民族との集い。「経済的植民地化とイデオロギーによる植民地化」に反対表明。

往路の機内で記者団に、原爆投下後の長崎で死んだ弟を背負う少年の写真を配布。ジョー・オダネルの写真で、裏には「戦争がもたらすもの」と記され自筆の署名が添えられている。

2018 年 4 月にバチカンの調査報告を受け教皇は、重大な過ちだったと認め被害者への謝罪を表明。その後 5 月に、チリ司教団は 34 司教全員が総辞職を申し出、教皇は司教団をバチカンに招集、3 日間の集中協議を行った。また、告発者との私的面会もバチカン内で行われた。5 月 31 日付で教皇は、チリの信者にあてた手紙を送っている。

3.19-24 プレシノドス

10 月の通常シノドスに向けた若者主役の準備会。カトリック信者だけでなく、新教、仏教、イスラームのほか、無宗教も含め約 300 人の青年が現地参加し、さらに facebook 上で 1 万 5 千人が議論にわり意見書をまとめた。

4.21 教皇庁教理省顧問に女性信徒任命

教皇庁内の最高権威とされる教理省の顧問に、史上初めて女性信徒を 3 名任命。

6.28 日本人の前田万葉を含む新枢機卿発表

6.21 ジュネーブ（スイス）訪問

WCC（世界教会協議会）70周年記念式典。「エキュメニカルな旅」と銘打ち、「ともに歩み、ともに祈り、ともに働く」をモットーとした。

7.7 パーリ（イタリア）訪問

正教会信者の巡礼地でもある当地で、中東諸教会の主教や指導者らとの、祈りと黙想の会。

8.25-26 アイルランド訪問

世界家庭大会（ダブリン）参加。聖職者による未成年者に対する性虐待や女性の搾取と、教会上層部によるその隠蔽について、被害者8名と面会し直接謝罪する。

9.22 中国と司教任命権を巡る合意発表

9.22-25 リトアニア、ラトビア、エストニア訪問

リトアニア（モットー「キリスト・イエス、われらの希望」）：若者との集いで、「愛と思いやりなしに、人々との共生も、ともに果敢に挑むことなく得られるものはない」と助け合いを説く。

ラトビア（モットー「母なるかた、み姿を示したまえ」）：高齢者との会合で、「若い世代は高齢世代を根として萌え出でる」のだから「皆さんの逆境を耐えるあかしと、預言のたまものによって若者世代を教えてほしい」と協力を求めた。

エストニア（モットー「目覚めよ、わが心」）：国民の75%が無宗教を自認する同国で、キリスト教諸派の若者を招くエキュメニカルな集いを開催。力づくで信者にするのではなく、ひたすら聞き、受け入れ、寄り添い、背中を押す、しかし何も強制しない、それが本来のキリスト教共同体であり、自分たち司牧者はそうありたいと語った。

10.3-28 シノドス

第15回通常総会。テーマ「若者、信仰、そして召命の識別」。会期中の14日に列聖式。パウロ六世教皇を列聖。

2019年

1.23-28 パナマ訪問

WYD パナマ大会参加。若者は未来であるだけでなく、今です、早すぎるという声にだまされずに今挑戦しなさいと、若者を励ます。

アマゾン・シノドスに続き、先住民族とアフリカ系アメリカ人の若者の集い。中央アメリカ司教団との会合では、敬愛する聖オスカル・ロメロ大司教の教えを確認。

2.3-5 アラブ首長国連邦訪問（モットー「わたしをあなたの平和の道具としてください」）

教皇がアラビア半島を訪問するのは初。とキリスト教との懸け橋となるだけでなく、強いきずなを示す。教皇を招待したアブダビ皇太子との会談も。

大イマームと「人類の兄弟愛についての文書」に署名。すべての人は神の子であり、兄弟姉妹として共通の使命をもち、宗教を理由にしたものを含めすべての暴力に反対することを表明。

2.21-24 教会内における未成年者保護の会議

全世界の司教協議会会長のほか、東方典礼カトリック教会指導者や修道会総長を含め190人が参集。会合は決議ではなく、被害者の生の声に全体で耳を傾けること、問題意識と解決の手がかりを共有することに終始。各日、責任、説明義務、透明性を主眼に3人のプレゼンテーションが行われた。3日目の夕刻には、「悔い改めの典礼」が執り行われ、「犯罪者をかばい、被害者に沈黙を強いてきた」との告解が行われた。最終文書は発表されていないが、4日目の閉会ミサの後、教皇による長い演説が行われた。

3.30-31 モロッコ訪問（モットー「希望の従事者」）

イスラーム研究所での諸宗教の集い、難民との集いなど。

国王ムハンマドと共同声明を発表。エルサレムの唯一性と聖性を確認。2017年12月6日のトランプ米国大統領による、エルサレムをイスラエルの首都と認める発表に対するもの。

ムスリムとの兄弟愛を強調。ヨハネ・パウロ二世による初のモロッコ訪問（85年）に続くものとしての訪問を振り返り、教皇がムスリムのもとにも行く理由を、「神は多くの宗教を存在することを可としている、神が恐れているのは相違ではなく、兄弟愛を望んでいるから」と述べた。

5.5-7 ブルガリア、北マケドニア訪問

ブルガリア（モットー「地上の平和」）：正教会の聖シノド（主教団）との会合をもち、キリスト教一致へ前進。難民キャンプ私的訪問。

北マケドニア（モットー「恐れるな、小さな群れよ」）：マザーテレサ記念館、青年との諸宗教・エキュメニカル集会。海外訪問時としては初めて初聖体の祭儀を執り行う。

5.31-6.2 ルーマニア訪問（モットー「ともに歩もう」）

ルーマニア正教会の聖シノド（主教団）との和やかな会談。キリスト教一致に向けたしるしとなる。ほか、エキュメニカルな祈禱会／東方典礼カトリックでの殉教者列福式／青年と家族との集い／ロマ共同体との交流

7.8 教皇庁の省に初の女性メンバー

奉献・使徒的生活会省のメンバーとして、女子修道会総長6人を任命。初の女性正式メンバー。

9.4-10 モザンビーク、マダガスカル、モーリシャス訪問

モザンビーク（モットー「希望、平和、和解」）：平和を実現する勇気を政治指導者らに求める。

マダガスカル（モットー「平和と希望の種を蒔く人」）：環境破壊と貧困の関係を訴える。首都郊外で宣教師が始めた事業の「友情の町」を訪問、労働者たちを励ました。

モーリシャス（モットー「平和の巡礼者」）：若者の失業問題に言及し、人間を中心とした経済政策の重要性を訴えた。

10.6-27 アマゾン特別シノドス

「アマゾン、教会と統合的エコロジーのための新たな歩み」をテーマに、アマゾンの地域と人々の現実を展望し、総合的エコロジーの視点から同地域が抱える苦しみと希望を見据え、福音宣教、インカルチュレーション、典礼、遠隔地域での司牧などの課題について、教会の新たな歩みを模索した。

10.20-26 タイ、日本訪問

タイ（モットー「キリストの弟子、宣教的弟子」）：1669年、「サイアム代牧区」が設立されて350周年を迎えた同国で、宣教を続ける教会関係者を励まし、また仏教の最高指導者らとも会談した。

日本（モットー「すべてのいのちを守るため」）：長崎でのミサ、広島での平和の集い、東京で東日本大震災の被災者との集い、若者との集い、ミサ、天皇・政府首脳らとの面談などを実施。

2020年

3.27 コロナ禍の中、聖体降福式

夕刻、雨の降る無人のサンピエトロ広場で聖体降福式を行い、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの収束を願い、ローマと全世界に祝福を送った。この前、10日には、イタリア政府による措置を受け、感染症の防止のため、サンピエトロ広場や聖ペトロ大聖堂などを閉鎖。この年の司牧訪問も中止・延期に。

2021年

1.31 「祖父母と高齢者のための世界祈願日」制定

コロナ禍の中、とりわけ高齢者に心を配るために制定。7月の第4日曜日と決められ、日本では、「敬老の日」前の日曜日に祝われることとなった。

2.6 シノドス事務局次長にベカー修道女任命

フランス人のナタリー・ベカー修道女が、女性初の世界代表司教会議（シノドス）事務局次長となり、シノドスで初めて投票権をもつ女性となった。このほか教皇はこの数年、国務省外務局次長、教理省聖書委員会委員などにも女性を登用してきている。

3.5-8 イラク訪問

コロナ禍後、初の司牧訪問。聖ヨハネ・パウロ二世教皇も、アブラハムの故郷ウルがある同国訪問を切望したが果たせず、教皇のイラク訪問は今回が初。イラクのキリスト教徒らを励まし、同国の復興と平和を祈り、諸宗教間の対話をはぐくんだ。

5.25 「『ラウダート・シ』アクションプラットフォーム」発足

2015年に発表された回勅『ラウダート・シ』に関連し、2020年5月24日より1年の「ラウダート・シ特別年」を布告。特別年終了に際して、『ラウダート・シ』アクションプラットフォームと名付けられた、新プロジェクトが発足した。総合的エコロジーの精神のもと、人類共同体が完全に持続可能なものとなるよう、さまざまな形で取り組む7年間の歩みとなる。

9.12-15 ハンガリー、スロバキア訪問

ハンガリー：首都ブダペストで、第52回国際聖体大会の閉会ミサを司式し、その他、司教団、政府首脳、キリスト教諸派とユダヤ教代表者らと面談した。

スロバキア：教会・キリスト教諸派・政府関係者と面談するとともに、困窮者の支援センターやホロコースト犠牲者の追悼施設、ロマ共同体を訪れた。また若者の集いでは、問題を抱える若者たちを励ました。

11.2 COP26に緊急メッセージ

グラスゴー（英国）で開かれた、国連気候変動枠組条約第26回締約国会議（COP26）に緊急メッセージを送った。気候問題への投資、経済システムと人々の生活の脱炭素化、循環経済の促進、貧しい国々の支援の分野で、指導的な役割を果たすよう各国に呼びかけた。

12.2-6 キプロス、ギリシャ訪問

キプロス（モットー「信仰のうちに互いになぐさめを与えて」）：ラルナカと首都ニコシアを訪問。マロン典礼のカトリック教会関係者、大統領ほか各界代表、キプロス正教会などを訪問。市内小教区で移民らとエキュメニカルな祈りの集いを実施した。

ギリシャ（モットー「神の驚きにますます自らが開かれるように」）：首都アテネとレスボス島を訪問。ギリシャ正教会のイエロニモス二世大主教をはじめ、教会関係者、政府要人と面談。レスボス島では移民の受入・登録センターで、難民たちと出会い、アテネのカトリック学校では若者の集いが開かれた。

2022年

2.25 駐バチカン・ロシア大使館で憂慮表明

この前日、ウクライナに対して、ロシアが全面的侵攻を開始したことについて、教皇自ら、駐バチカンのロシア大使館に出向き、深く憂慮していることを直接伝えた。

4.2-3 マルタ訪問

(モットー「島の住民は大変親切にしてくれた」使徒言行録 28・2)：政府要人、教会関係者、イエズス会士らとの会合のほか、ゴゾ島のタ・ピヌ巡礼聖堂で祈りの集い、ラバトの「聖パウロの洞窟」訪問、ハル・ファの移民センターで移住者たちとの交流。

5.4 岸田首相と会談

欧州訪問中の岸田文雄首相と会談。核兵器問題を巡り、その使用・保有がいかに理解しがたいものかが話された。

7.13 教皇庁司教省メンバー発表

教皇は司教省の新メンバー14人を任命し、そのうち、女性が3人(修道女2人、信徒1人)を占めた。これにより、司教省が担当する教区の司教選出プロセスに、女性が加わることとなった。それ以外のメンバー構成は、枢機卿3人、大司教・司教4人、司祭3人。

7.24-30 カナダ訪問

(モットー「ともに歩む」)：1週間にわたり、エドモントン、マスクワシス、ラック・サンタンヌ(以上アルバータ州)、ケベック市(ケベック州)、イカルイト(ヌナブト準州)を訪問。政府・教会関係者らとの面談のほか、同国の同化政策のもと、カトリック寄宿学校で虐待を受けていたことが明らかとなった先住民族の問題に関連し、その元生徒やそれ以外の先住民族代表者らとの会合が開かれた。これは教皇が強く希望したものであり、国務長官パロリン枢機卿は「痛悔の巡礼」であると語った。

9.4 ヨハネ・パウロー一世列福

1978年8月に選出され、わずか33日後に死去した同教皇(アルビーノ・ルチアーニ枢機卿)の聖性の誉れがたたえられ、福者にあげられた。

9.13-15 カザフスタン訪問

首都ヌルスルタンで開催される「第7回世界伝統宗教指導者会議」への出席とともに、同国のカトリック教会関係者を励ますことを目的とした。

9.22-24 経済を語る若者の集い Economy of Francesco 開催

イタリア・アッシジで、経済をテーマにした若者たちのミーティング「Economy of Francesco(フランシスコの経済)」を開いた。正義にかなう包摂的経済を考察することを目的とし、教皇の呼びかけに応え、世界各国の若い経済学者や起業家らが参加した。

11.3-6 バーレーン訪問

4日間の訪問で、東洋と西洋の人類の共存をテーマとする「対話のためのバーレーン・フォーラム」への出席を中心に、同国の各界代表との会見、イスラーム指導者やキリスト教諸教会代表との出会い、同国のカトリック共同体やアラブ世界北部で働く教会関係者との交流、若者たちとの集いなどが実施された。

2023年

1.31-2.5 コンゴ民主共和国、南スーダン訪問

コンゴ民主共和国：首都キンシャサで、政府要人、教会関係者と会談し、同国東部における紛争犠牲者らとも面会した。

南スーダン：首都ジュバで政府要人、教会関係者と面談。長く続く紛争に苦しむ国内難民とも会見し、エキュメニカルな祈りでは、キリスト教諸派による南スーダン平和巡礼の機会とした。

4.28-30 ハンガリー訪問

(モットー「キリストはわたしたちの救い」)：政府要人、教会関係者らとの会談のほか、障がい児施設を訪問、貧しい人・難民との出会い、ギリシャ典礼カトリック教会共同体との集い、若者との集いなどを実施した。

5.13 ゼレンスキー大統領と面談

ローマ訪問中のウクライナのゼレンスキー大統領と、バチカンにて個別面談し、継続する戦争によってもたらされている人道・政治状況について話し合った。

8.2-6 ポルトガル訪問、第 37 回ワールドユースデーの機会に

ポルトガルにおける 5 日間の滞在で、ワールドユースデー大会の開催地、首都リスボンを中心に、リスボンの東近郊カスカイスで大学生との集いを行い、またポルトガル中西部の聖母巡礼地ファティマにも訪れ、若い病者たちとロザリオを祈った。リスボンでは若者たちと十字架の道行を行い、ゆるしの秘跡を授け、ミサをともにささげた。

8.31-9.4 モンゴル訪問

(モットー「ともに希望をいだいて」)：首都ウランバートルに滞在しつつ、政府関係の公式行事、教会関係者との司牧的交流、キリスト教諸教会や諸宗教の代表者らとの出会いなどの機会をもった。社会福祉施設の「いつくしみの家」を訪れ、その開所式を行った。

9.22-23 マルセイユ (フランス) 訪問

地中海地域の教会・行政責任者が集まり、とくに移住者の現象を背景に平和、協力、統合の推進をめざす「地中海会議」の終盤に出席するために訪問。地中海諸地域が、連帯をもって貧困に立ち向かう「善の海」「受容の港」「平和の灯台」となるよう呼びかけた。

10.4-29 世界代表司教会議 (シノドス) 第 16 回通常総会第 1 会期開催

「ともに歩む (シノドス的) 教会のため——交わり、参加、そして宣教」をテーマに、二つの会期に分けられたシノドスの第 1 回目が開かれた。2021 年以降、地方教会レベル→大陸レベルと、傾聴、対話、考察の歩みを続けてきたのち、ローマでの総会に世界中から、枢機卿、司教、司祭、修道者、信徒を含め、投票権のある代表者 363 人が集まり、うち女性 54 人が初めて投票権をもった。日本からは 3 人参加。事前に準備された『討議要綱』をもとに、種々のテーマについて話し合い、それが『まとめ』報告書として集約され、第 2 会期へと継続された。参加者全員が円形テーブルについて小グループに分かれ、分かち合いを繰り返すという新しい形式なども話題となった。

12.2 ドバイでの国連気候変動枠組条約会議 (COP28) ヘメッセージ

健康上の理由でドバイ訪問を中止した教皇に代わり、国務省長官のパロリン枢機卿がそのメッセージを代読。「分裂を過去のものとし、戦争と環境破壊の闇から抜け出そう」と呼びかけた。

12.18 同性カップルへの祝福に道を開く教理省文書

教皇庁教理省が発表した、祝福の司牧的意味に関する宣言『フィドゥチア・スプリカンス』により、ミサなど、正式な典礼ではない祝福を与えることは可能と認められ、教皇もこれを認可した。

2024 年

5.24-25 第 1 回「世界こどもの日」開催

新たに制定した「世界こどもの日」の第1回を開催し、25日の午後には、ローマ・スタディオ・オリンピコで子どもたちと交流した。

6.14 イタリア・プーリアで開催のG7サミット出席

議長国イタリアからの招待を受け、教皇がG7会議に参加するのは、今回が初。各国首脳と会談し、また人工知能（AI）をテーマに、それが与える可能性への熱狂と、悪影響に対する恐れが共存する両面性に言及した。

9.1-13 インドネシア、パプアニューギニア、東チモール、シンガポール訪問

インドネシア：（モットー「信仰・兄弟愛・あわれみ」）：政府要人、教会関係者との面談のほか、若者の家や、教会による福祉支援を受けている人たちを訪問し、またジャカルタのモスクで諸宗教の代表者らと会談した。

パプアニューギニア：（モットー「祈り」）：政府要人、教会関係者との面談のほか、カトリック中高で子どもたちと交流、若者たちとの集いを行った。

東チモール：（モットー「あなたの信仰がああなたの文化となりますように」）：政府要人、教会関係者との面談のほか、障がいのある子どもや若者たちとの集いをもった。

シンガポール：（モットー「一致・希望」）：政府要人、教会関係者との面談のほか、カトリック施設にいる高齢者、障がい者、大学生らと交流した。

9.26-29 ルクセンブルグ、ベルギー訪問

ルクセンブルグ：（モットー「仕えるために」）：政府要人、教会関係者との面談した。

ベルギー：（モットー「希望に満ちた旅路」）：政府要人、教会関係者との面談のほか、二つのカトリック大学と福祉施設を訪問、また、性虐待被害者、難民らと交流した。

10.2-27 世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会第2会期開催

シノダリティに関するシノドスの第2会期。参加者は第1回とほぼ同様、投票権をもつ参加者は368人。『最終文書』を採択して終了した。こののち、同文書に挙げられている教会生活のいくつかの側面や、10の「研究部会」が2025年6月に向けて提案する諸テーマをめぐり、2028年までの期限を設けて引き続き傾聴、対話と考察を続けるよう呼びかけている。

12.15 アジャクシオ（フランス・コルシカ島）訪問

（モットー「謙遜になるほど、神はわたしたちを高めてくださる」）：「地中海地域の民間信心」をテーマとする会議で講話するための日帰り訪問。教会関係者やマクロン大統領とも面談した。

2025年

1.6 奉献・使徒的生活会省長官にブランビッラ修道女

教皇庁奉献・使徒的生活会省の新長官に、同省次官だったシモーナ・ブランビッラ修道女を任命、教皇庁の「省」における初の女性最高責任者となった。副長官はアルティメ枢機卿。2013年から2023年にかけて、教皇庁とバチカン市国で働く女性の割合は、19.2%から23.4%に増加した。

2.14 ジェメッリ病院に入院

気管支炎の検査と治療のため、ローマ市内のジェメッリ病院に入院。3月23日に退院し、療養を続けた。

2.15 バチカン市国行政庁長官にペトリーニ修道女

バチカン市国委員会の新議長、およびバチカン市国行政庁の新長官に、これまで同庁次官を務めたラファエラ・ペトリーニ修道女（聖体のフランシスコ修道女会）を任命した。